

## 藤森栄一 略年譜

|                         |  |
|-------------------------|--|
| 明治44年(1911) 8月15日       | 上諏訪町の書籍文具商 藤森益雄と志うの長男として生まれる                             |
| 大正13年(1924) 4月          | (13歳) 県立諏訪中学校(現諏訪清陵高校)入学                                 |
| 昭和4年(1929) 3月           | (18歳) 諏訪中学校卒業<br>7月 伏見宮博英来訪、尖石遺跡などの発掘調査に随行する             |
| 昭和8年(1933) 9月           | (22歳) 上京し森本六爾の下へ通う                                       |
| 昭和11年(1936) 1月          | (25歳) 森本六爾死去、臨終に立ち会う                                     |
| 昭和12年(1937) 4月          | (26歳) 株式会社大阪鉄工所に入社し社内誌などの編集に従事                           |
| 昭和13年(1938) 10月         | (27歳) 矢崎みち子と結婚   |
| 昭和14年(1939) 1月          | (28歳) 大阪鉄工所退社<br>8月 上京しアパート管理人を務めながらアパート内に東京考古学会東京研究所を開設 |
| 昭和15年(1940) 9月          | (29歳) アパート経営に失敗し管理人を辞任                                   |
| 昭和16年(1941) 5月          | (30歳) 日本橋区の杉原商店(杉原莊介実家)2階を借り「葦牙書房」を開業                    |
| 昭和17年(1942) 11月         | (31歳) 収集を受け漢口(中国)へ送られる                                   |
| 昭和19年(1944) 3月          | (33歳)『信濃諏訪地方古墳の地域的研究』(伊藤書店)を出版                           |
| 昭和20年(1945)             | (34歳) ポルネオで終戦を迎える  |
| 昭和21年(1946) 1月          | (35歳)『かもしかみち』(葦牙書房)を出版                                   |
| 6月                      | 復員し諏訪へ帰郷   |
| 昭和23年(1948) 10月         | (37歳) 上諏訪駅前で古書店「あしかび書房」を始める<br>「諏訪考古学研究所」を開設する           |
| 昭和27年(1952) 10月         | (41歳) 諏訪市茶臼山遺跡発掘調査                                       |
| 昭和28年(1953) 10月         | (42歳) 高血圧症で倒れる。以降もたびたび倒れることになる                           |
| 昭和31年(1956)             | (45歳) 旅館「やまとや」の経営を始める                                    |
| 昭和39年(1964) 8月          | (53歳)『銅鐸』(学生社)を出版  |
| 11月                     | 同書が「毎日出版文化賞」を受賞  |
| 昭和43年(1968) 6月          | (57歳) 長野県考古学会長に就任  |
| 昭和46年(1971) 2月          | (60歳)『心の灯』(筑摩書房)を出版                                      |
| 5月                      | 同書が「サンケイ児童出版文化大賞」を受賞                                     |
| 昭和48年(1973) 12月19日(62歳) | 心筋梗塞のため死去  |

## 没後50年 考古学者

# 藤森栄一



## 没後50年 考古学者 藤森 栄一

発行日 令和5年(2023) 11月18日  
発 行 〒392-0015 長野県諏訪市中洲171-2  
諏訪市博物館  
印 刷 株式会社中央企画  
本書の無断複製・転載を禁じます

SCM 諏訪市博物館

令和5年(2023)は、諏訪市出身の考古学者・藤森栄一さいいちが亡くなつて50年になります。終生在野で考古学を研究し、諏訪のみならず日本の考古学に大きな足跡を残しました。

この冊子では、郷土の偉大な先人一人である藤森栄一の生涯を紹介します。「縄文農耕論」はじめ学術上の業績は著名ですが、その人生とはどんなものだったのでしょうか。挫折や失敗もありました。それでも家族や仲間に支えられて必死に生きた、波乱万丈の62年を追いながら、情熱と人間味にあふれた藤森栄一の息遣いを感じいただければ幸いです。

- 本書は令和5年11月18日(土)から12月24日(日)の会期で開催する諏訪市博物館企画展「没後50年 考古学者 藤森栄一と諏訪の考古学」に合わせて作成した。
- 写真で掲載している資料は藤森栄一資料を中心に、当館所蔵のものである(一部除く)。
- 本書の執筆は『考古学とともに』(1970)・『心の灯』(1971)など藤森栄一の著書をもとに、生涯学習課の中島透が主として行い、当館学芸員の児玉利一が加除修正・編集を行った。

## 藤森栄一、誕生

明治44年(1911)8月15日、上諏訪町(現・諏訪市)の書籍文具商・加賀屋博信堂の藤森益雄・志うの長男として藤森栄一は誕生しました。この日、諏訪では大洪水に見舞われ、博信堂も床上浸水する中、店に戻った益雄が見たものは泥水に浮いていた赤ちゃんの入ったタライでした。その赤ちゃんが栄一でした。益雄は「よりによってこんな日に生まれてこなくてもいいのに」と言ったといいます。

この頃の上諏訪は、明治38年(1905)に鉄道が岡



栄一の生家 加賀屋博信堂



小学校入学の頃 右は父、中央は弟

谷駅まで開通し、上諏訪駅の周りには徐々に店が集まり始めていました。加賀屋は旧高島藩の城下でも有数のれんの古さを誇る商家の一つで、その末っ子だった益雄は明治41年(1908)に分家を許されて新聞地だった上諏訪駅前に店を構えたばかりでした。長男が第一という封建的な時代背景がまだ色濃く残り、それはのちの栄一の人生に影響を与えることになります。

## ヤジリに魅かれ、少年考古学者へ

家業に忙しい両親はあまり栄一に手をかけることができず、栄一はいつも一人で遊んでいたといいます。小学校へ入って間もないある日、店の土蔵の暗がりの中で栄一は不思議なものを見つけます。台紙に糸で縫いつけられた三角形の石。天窓のひもを引っ張って光が差し込むと、それらは姿を現わします。



曾根遺跡の石器

その石たちは、諏訪湖底から引き揚げられた曾根遺跡の膨大な数の石器でした。この妖しい魅力にすっかりとりつかれた栄一は、それらをこっそり持ち出し、台紙から切り取って触ったり並べたり、布団の中にまで持ち込んでその感触に浸りました。この石器は考古学者・藤森栄一の原点になったといえるでしょう。しかし、ある日父に見つかり、厳しい叱責を受けました。「商人に学問はない」「商人の家に生まれた者は自分の夢は捨てなければならない」と諭されたのです。しかし、その曾根遺跡の石器の虜になつた栄一はもはやその欲求を止められず、旧制諏訪中学校(現・諏訪清陵高校)を親に内緒で受験し、商人に不要だと言われた学問の世界にどんどん入り込んだ



中学生の頃

でいきました。

栄一は「有史以前に於ける土錐の分布と諏訪湖」と題する論文を書き、中学の学友会誌に発表しました。これは、諏訪地方で発見された漁労具としての土錐の分布から古代の諏訪湖の大きさを推定するというもので、この時若干16歳。新聞にも取り上げられ、一躍話題の人となりました。

## 三沢勝衛の教え

栄一の諏訪中学校在学中、忘れることのできない一人の先生がいました。地理を教えていた三沢勝衛(1885～1937)です。三沢の考え方方は、「一つのことを取り上げて研究しても、それらと絡み合っている他の要素のことを知らなければ全体を理解することはできない」というもので、それを学校の授業で実践していました。栄一はそれを「型破りな授業」と述懐しています。教科書は使わずフィールドワークが中心で、岩石、地質、気象、水質などを実地に出て生徒とともに研究し、のちに「風土論」と呼ばれる独自の學問を形成していきました。特に太陽の黒点観測は現在でも続けられているほどです。また、「一生勉強を続けることが人間である」と常に語っていたといいます。

栄一はこの三沢の教えに大きな影響を受け、それを自分の考古学の姿勢に反映させていくのでした。



三沢勝衛

## 挫折と嫉妬と苦悩と

諏訪中学は当時誰もが通えたわけではなく、むしろその家にとっては名誉なことでした。従って栄一の両親も、学校は中学までと条件を付けて通学を認めました。し



伏見宮の尖石遺跡調査(写真提供:  
茅野市尖石縄文考古館)

かし卒業すると約束通り家業に戻されてしまいます。上の学校へ行って専門的な考古学を学びたかった栄一はついにそれが叶わずに学校生活を終えることになりました。

他の級友たちは上級学校へ進学する者もあり、栄一はじりじりと身を焦がします。卒業後、皇族の伏見宮博英が諏訪地方に調査旅行に訪れ、栄一に随行の白羽の矢が立ちました。栄一はこの「宮様」考古学者とひととき発掘調査を楽しみましたが、見物人からの「なんだ、ホンヤの小僧か」というヤジにショックを受けます。また、自分が知っていたはずの遺跡が次々と「発見」され、宮様に発掘されて悔しかりもしました。

## 両角守一との出会い

もうひとつ重要な人物は明治31年(1898)上諏訪生まれで、銀行に勤めながら考古学者でもありました。昭和2年(1927)のある日、両角が栄一の家を訪ねてきました。そして、栄一が部屋に並べていた土錐や石器を見て「土器はどうした。これだけ土錐を拾うには土器もうんとあつたはずだ」と言いました。破片しかない土器は拾っていないかった栄一にとって、その言葉は脳天を叩かれた思いだったそうです。それ以来両角と行動を共にして実測・拓本・写真をとる、という考古学の基本を実践するようになった、まさに學問としての考古学研究を教わった師匠でした。

両角はその後、昭和恐慌の影響で銀行が破綻し、また本人も結核を患い昭和11年(1936)2月4日、39歳で亡くなります。それでも死の間際まで論文執筆に執念を燃やした、在野の考古学者の先達でした。



両角守一

## 森本六爾との出会い



森本六爾

中学卒業後の栄一は、進学の夢が断たれたといいうものの、家業の合間を縫って遺跡に足を運び、遺物を採集し、報告書を書いていました。そのうちに、栄一が発見した資料のことを聞いたある人物から手紙がきました。そこには、その発見を報告してほしいというもので、それに応えて栄一が原稿を送ると、その出来の良さを褒める電報が届きます。その人物は森本六爾。東京考古学会を設立した、新進気鋭の

アマチュア考古学者でした。

昭和8年(1933)、上京した栄一は東京での生活費を得るために、「適当な仕事の紹介を頼みに」森本を訪ねました。ちょうど外出するところだった森本はそのまま栄一を連れて東京帝国大学(現・東京大学)に行き、そこで弥生文化に関する講演を行いました。栄一はその話に感動し、以後、森本を師と仰ぎ、森本のもとで考古学を学びました。

しかし、栄一の面倒を見てくれる森本自身も経済的に苦しい中、東京での生活は限界に達し、栄一は郷里に帰ることとなりました。



栄一宛て森本からの葉書  
(昭和8年10月25日印)

## 師との別れ

失意の帰郷後、栄一は閉塞感ただよう生活に戻ります。しかし森本や同い年で東京考古学会の小林行雄(のちに京都大学教授)からは奮起を促す手紙が多く舞い込み、栄一は考古学に関する文を多く書き続けています。特に隨筆のような文章は反響があったようです。のちに文筆家としても多彩な才能を發揮する芽は、この頃か

ら現われていたと言えるでしょう。

一方、森本は考古学研究のため滞在したパリで体調を崩して以来、病に侵されつつありました。昭和11年(1936)、栄一のところに森本が重篤であるという電報が届き、栄一は急いで森本のもとへ向かいます。栄一が訪ねてくることを心待ちにしていた森本は、栄一との再会を果たすと、安心したかのようにその数時間後に息を引き取りました。わずか32歳の波乱の人生でした。

栄一はじめ森本の薰陶を受けた弟子たちは、森本が創り、遺したアマチュア考古学の砦、東京考古学会と機関誌『考古学』を守り、育てるることを誓い合ったのでした。



小林行雄からの電報

## サラリーマン兼研究者

昭和11年(1936)、栄一は京都の小林行雄を訪ね、二人で共同生活を始めます。京都での生活を安定させようとしていたある日、栄一は一人の紳士の訪問を受けます。坪井良平、大阪鉄工所(現・日立造船)の課長であるこの人物は、梵鐘研究の第一人者で、森本六爾とともに東京考古学会を設立し、森本亡き後は会長として同会を支えていました。坪井の援助で森本がやり残した弥生式土器集成のための調査に九州へ行ったり、奈良県で発見された唐古遺跡の調査に加わりました。



昭和12年の奈良県唐古遺跡調査(右端が栄一)

唐古の調査が終わると、再び坪井に導かれて栄一は大阪鉄工所に入社することになり、会社員として社史や社内誌の編集をしながら、坪井の調査に同行するなど忙しい日々を送りました。また栄一の住まいには多くの考古学仲間が集まるようになりました。

ました。この大阪時代は、陰日向となって栄一を助けた坪井の存在なくしてはあり得なかったものでした。

## 矢ヶ崎みち子との結婚



みち子との結婚記念写真

大阪時代、自分の境遇に改めて疑問を持った栄一は、テーマを決めて研究に取り組もうとしました。そのテーマは郷里・諏訪の後期古墳の地域的研究というものです、時間を見つけては諏訪に戻って実地調査を行いましたが、調査の助手が得られず、なかなかはかどらなかったようです。そこで郷里の友人に相談すると、当時諏訪教育界の重鎮であった矢ヶ崎輝雄を紹介されます。栄一が矢ヶ崎を訪ねると、「今は誰も手が空いていないが、自分の娘でよければ応援させる」と言ってもらったといいます。その娘がみち子でした。以後、みち子が助手として栄一の調査を支えることになりました。

諏訪での調査は一週間ほどでしたが、その後、当初は論文の作成に関して始まった手紙のやり取りから次第に愛が芽生え、昭和13年(1938)、二人は結ばれました。

## 再び東京へ

大阪での忙しい生活に体も経済的にも限界に近づいた時、大阪鉄工所の同僚から東京のアパート管理の仕事を紹介された栄一は、昭和14年(1939)一家をあげて再び東京に向かいました。

東京では東京考古学会の学友である杉原莊介すぎはら ひさすけ(のちに明治大学教授)と語り、そのアパートの一室に東京考古学会の東京研究所を作って、論文の執筆や、発掘調査の指導など、東京考古学会の活動に明け暮れました。しかしアパート管理に失敗して転居、東京研究所は消滅してしまいます。さらに日中戦争の激化により栄一



森本の墓参りで集まつた東京考古学会の面々 左から杉原莊介・栄一・丸茂武重・酒詰仲男・和島誠一(昭和13年・撮影は永末雅雄)

栄一は師・森本から後を託されたアマチュア考古学の殿堂東京考古学会を自らの手で消してしまったことを終生悔やむことになるのです。

## 出征、そして生還

昭和17年(1942)、東京の栄一のもとに1本の電話が入ります。それは諏訪の実家からで、栄一に召集令状が届いたというものでした。入営日まであと16日。栄一は前年から経営を始めた革牙書房の残務を片付け、5本の論文を書きあげるなど、「生涯のもっともいとおしい半月」を過ごした後、軍隊に入りました。栄一の部隊はすぐに中国へ送られ、その後南方へ転進しました。もはや戦闘ではなく逃亡行だったという南方戦線を生き抜き、ボルネオで終戦を迎めました。

栄一は軍隊にありながらも論文を書き続けました。事情を記したメモをつけて戦線から帰還する逆方向行きの列車に託した2本の論文のうち1本が無事日本に届いて雑誌「古代文化」に掲載されました。栄一は何としても生きて帰るという心の支えがありました。それは妻みち子の、「藤森考古学研究所を作つて待っている」という言葉だったといいます。そして生還を果たした栄一は、諏訪に



昭和19年出版で栄一初の単著

家は経済的にも窮乏します。

そんなとき、研究者の地位向上を図って全国の考古学組織を結集しようという動きが起ります。栄一は、今より悪くなるはずがないとこの計画に乗りましたが、中途半端な形となり、栄一にとっては東京考古学会の消滅のほかに何も残りませんでした。

疎開していたみち子や子どもたちと再会したのです。

## 諏訪考古学研究所

復員して、何もないところから出発することになった栄一は、諏訪で復活させた葦牙書房の一角に、「諏訪考古学研究所」を開設しました。戦争中その設立を心の支えとし、生還を果たす原動力となった、念願の考古学の研究所でした。しかし、最初に研究所に集った少年たちは、遺物を集めるのが趣味というだけで、学問に発展しなかったといいます。しかし次のメンバーは、研究意欲に燃えた高校生や中学生たちで、諏訪地方を飛び回って遺跡を発見、調査していきます。研究費は全て私費のため、その捻出に栄一は苦労ましたが、茶臼山遺跡の発見など、大きな成果を挙げていきました。

若きメンバーが進学などで研究所を卒業すると、今度は普段は別の仕事をしながら考古学を研究しようという人々が集まりました。栄一は、彼らとともに自分も一緒に勉強しようと考えます。三沢勝衛の「一生勉強を続けろ」という教えがここにも生きています。



昭和25年茅野市芥沢遺跡（左から戸沢充則・栄一・松沢亜生）

## 葦牙書房

昭和16年（1941）栄一は、学友の一人で当時実家の社長を務めていた杉原莊介の経営する杉原商店の2階を間借りして「葦牙書房」を開業しました。「葦牙」はもともと杉原が設立した「葦牙会」がルーツで、これは『日本書紀』の一節からとられたものでした。栄一は森本六爾をはじめ、直良信夫、杉原莊介、大場磐雄などの著作や日本古代文化学会の機関誌『古代文化』などをここから刊行しました。



昭和21年発行「かもしづみち」

栄一が出征すると休業状態となります。栄一の復員後は諏訪で活動を再開します。名前も「葦牙書房」から「あしかび書房」に改め、のちに名著と称えられた『かもしづみち』などを刊行します。また詩人尾崎喜八などの文学書も出しました。

しかし次第に経営が悪化したため古書店を兼業するようになりますが続かず、昭和24年（1949）に閉業しました。わずか8年という短い期間でしたが、歴史書を専門とする出版社として戦前戦後に一瞬の輝きを放ちました。

## 病との闘い

栄一は南方戦線に従軍中、脚気や潰瘍それにマラリア熱に侵されました。これが復員後も高血圧症となって栄一を苦しめました。昭和28年（1953）、最初の発作に襲われ、半身不随となります。しかし妻みち子の献身的な介護のもとリハビリに励んだ結果、快方に向かいました。しかし昭和30年（1955）、回復後初めての記念すべき発掘調査中（まわり場古墳）に石室に転落、1年を寝たきりで過ごしました。

昭和34年（1959）、再起を誓って震える手で図版まで作成して1本の論文を書き上げます。雑誌『信濃』に掲載されたその論文のタイトルは「諏訪湖底曾根の調査」。かつて栄一少年を考古学の虜にしたあの遺跡が栄一を再び考古学の世界に呼び戻したのでした。

しかしその後も病は栄一を襲い続けました。そのつど不屈の精神で復活するものの、確実に栄一の体を蝕んでいったのです。

## 縄文農耕論の追求

昭和28年（1953）、富士見町新道で歴史学会のメンバーがカップ型の土器を発見したことを契機に、諏訪考古学研究所が新道遺跡を発掘調査しました。そこからは後に「有孔鍔付土器」と名付けられる独特的の土器をはじめ、深鉢3点、カップ型、浅



新道遺跡1号住居跡出土縄文土器

鉢の計6点の土器が描きました。

この組み合わせは一体何を意味するのか。栄一はこれら6個の土器はそれぞれ貯蔵、煮沸そして供献の形態を示すもので、このようなセット関係を持つ縄文時代中期社会は農耕文化であると考えました。縄文農耕論は仲間の中でも意見が分かれる中、藤森はその可能性の証明に向けて、さらに研究を進めたのです。



昭和40年出版「井戸尻」

## 文筆家・藤森栄一

栄一は昭和36～7年(1961～2)にかけて、諏訪神社およびその神宝である鉄鐸に関する研究を立て続けに発表していました。これに目をとめた出版社の担当者が、栄一にまとめて出版しないかと持かけました。学界からは何の反応もなかったその論文を本にしようという「冒険」に感動した栄一は、鉄鐸と銅鐸の関係をさらに追求して一冊の本にまとめました。昭和39年(1964)に刊行されたこの本、「銅鐸」は特に一般の読者から大きな反響があり、毎日出版文化賞を受賞しました。栄一はこのことが大きな刺激となり、執筆活動にも熱心に取り組み、数多くの著書を発表してきました。それは、考古学に関するものから、郷土信濃について触れた隨筆、さらには郷土の歴史をベースにした小説まで多彩なものでした。

栄一が生涯に出したその数は31冊。栄一ならではの、わかりやすく時に情熱的な文章は、考古学を一般の人々にとって身近なものにしていきました。



「銅鐸」の手書き原稿

## 霧の子孫たち

昭和43年(1968)、長野県企業局による霧ヶ峰～美ヶ原を縦断する有料道路、通称ビーナスラインの建設ルートが、日本を代表する高層湿原である八島ヶ原湿原と、

諏訪社の重要な祭祀遺跡である旧御射山遺跡の中を通過することがわかりました。栄一は貴重な自然と遺跡を守るために、同志とともに反対運動に取り組み、最終的に湿原と遺跡を迂回するルートに変更させることに成功しました。このことは、栄一の1年後輩で盟友の一人であり、作家となった藤原寛人(ペンネーム:新田次郎)がのちに小説にまとめました。

栄一はまた、曾根遺跡が諏訪湖の浚渫事業によって失われる恐れが



出てきたため、この保存活動にも取り組みました。結果、曾根遺跡は浚渫対象区域から外されることになり、学史に名高い曾根遺跡も守られることになったのです。

## ただひたすらに

何度も病に襲われた栄一は、これ以上発掘調査で遺跡に立つことができないことを悟ります。そんな中でビーナスラインの問題が起きたことを契機に、自然や文化財の保護活動に取り組んでいきました。また「銅鐸」の発表以後、「死から逃れる唯一の方法」であり、また「幸福」であったという文筆活動も精力的に行いました。毎年、必ず何らかの著書を刊行していく姿には、鬼気迫るものがあります。

昭和48年(1973)12月19日、栄一はその波乱に富んだ人生を終えました。享年62歳でした。亡くなった那年に刊行された著書は5冊。入院中でも原稿を持ち込んで、まさに生きている限り筆を動かし続けたのでした。



「生きるとはただひたすらに生き抜くことである」と述べた栄一は、確かに、ただひたすらに生きて、迷ってさまよって、考古学とともに生き抜いたのです。

## 縄文農耕論のその後

栄一が提唱した縄文中期農耕論は学界に大きな反響を呼び、肯定派、否定派が意見を戦わせました。否定派は、具体的な栽培植物が発見されないこと、栄一の農耕論はハゲ岳山麓だけに限定され、縄文後期以降は農耕が継承されないことなどを挙げて論の不十分さを指摘しました。栄一は、栽培植物発見の有無ではなく、考古学はあくまで遺跡や遺物からその社会の復元を目指すべきだと述べ、さらに研究を進めましたが、存命中にそれを証明することはついにできませんでした。



荒神山遺跡出土の炭化種子

ところが栄一死去の翌年、諏訪市荒神山遺跡で炭化した種子の塊が出土しました。鑑定の結果それはアワとされ肯定派は沸き立ちましたが、後にエゴマと訂正されました。しかしエゴマも栽培植物の一種であり、縄文中期にこうした植物が存在したことが明らかになったのです。

現在ではある程度の管理栽培的な形態があった可能性が指摘され、縄文農耕論は今もさまざまな角度から検証が進められています。

## 遺された資料と人々の思い

栄一が生涯に蒐集し、また諏訪考古学研究所での発掘調査における出土遺物などは約6万点を数えます。栄一亡き後も妻みち子や研究所員らにより守り続けられ、多くの研究者らが資料と研究所・やまとや（栄一らが経営していた旅館）を目的に訪れました。

資料は昭和63年(1988)に諏訪市に寄託され、平成2年(1990)に諏訪市博物館が開館するにあたっては栄一記念コーナーが設けられました。平成21年(2009)、みち子が亡くなりました。諏訪市における栄一とその所有資料の重要性ならびに将来にわたり大切に守り続けることが必要であるとのご遺族らの思いから、平成22年には諏

訪市に一括して寄贈されました。そのうち、考古遺物59,628点が、平成24年9月6日付で国登録有形文化財に登録されました（登録名称は諏訪地域考古資料（藤森栄一蒐集品））。

また、栄一が大正14年に発掘調査し論文が評価されて森本六爾らとつながるきっかけになった、岡谷市長地東堀出土の灰釉藏骨器など3点が、東京国立博物館に現存していたことが判明し、さらに昭和17年10月6日に栄一が当時の東京帝室博物館に預けていたことも分かったことからご遺族に返却され、さらに諏訪市に寄贈されました。栄一が東京に居た頃、帝室博物館の保管庫に自由に出入りさせてくれた、東京考古学会で同世代の会員・友人であった同館職員の神林淳雄を頼りに預けていたようです。栄一は翌11月に出征していることから、とくに大切だった品を託していったのかもしれません。将来有望な若き考古学者でもあった神林も昭和19年に召集されて、20年に沖縄本島で戦死してしまいました。

戦中戦後の混乱で経緯や所在が不明となっていた資料が、約80年ぶりに諏訪へ帰ったことは、彼らが託した思いも含めて大切な資料です。栄一のことや資料群を永く大切に守り、そして多くの人々に知ってもらう取り組みを続け、先人たちの思いを繋いでいきます。



国登録有形文化財の一部



東京国立博物館から返った灰釉陶器



東京考古学会例会での茅野市尖石遺跡発掘（昭和15年6月16日 左側2列目の左端が栄一、右は神林淳雄 写真提供：茅野市尖石縄文考古館）